

2) 情報インフラ基盤を活用したデータ流通方策の検討

上石 勲 (サブプロ (a) 統括)

防災科学技術研究所 首都圏レジリエンス研究センター副センター長)



サブプロ (a) の上石統括は、「下図が、私たちが検討しているデータ流通方策の全体像。防災科学技術研究所 (防災科研) をデータプラットフォーム拠点化し、役に立つ情報を作っていくことが私たちの目標」とし、防災科研の情報インフラ基盤を活用したデータ流通方策について解説しました。

レジリエンスに必要な多種多様で大量なデータを安全・安心に利活用できる環境を作るため、サブプロジェクト (b) (c) で収集・生成されるデータや、データ利活用協議会 (デ活) の参加企業から提供・共有されるデータをデータベースに入れていきます。また、防災科研がすでに保有している情報インフラ基盤を活用し、それらを実装していきます。

その基本的な考えとなっているのが Society 5.0 です。3次元の地理データ、人間の行動データ、交通データなど、さまざまな大量のデータをビッグデータとして適切に収集し解析し、横断的に活用します。そのデータを活用して、今度はモノ・サービスを、必要な人に、必要なときに、必要なだけ提供し、社会のさまざまなニーズに効率的かつこまやかに対応します。

防災科研が保有するインフラ基盤は3つです。1つ目がSIP4Dです。オープンデータ、センサーデータ、内閣府や国交省などの国のデータ、都道府県・市町村のさまざまなデータをやりとりするところです。2つ目が、防災情報サービスプラットフォームです。これは標準化され、セキュリティを強化したデータを基盤とし、地図情報や分析、基幹業務システムに配信するサービスプラットフォームとして考えています。3つ目が気象ハブです。気象のセンシングデータ、ソーシャルデータ、オープンデータ、防災科研が持っているデータの中に、交通、物流、人流、物販などのデータも入ってくるため、防災だけでなく観光・農業などにも活用できます。

上石統括は「現在、まさにデータプラットフォームの中にデータの集積を開始したところ。皆さんのデータも活用しながら、利活用できるようにしたい」としています。

